

## 第一章 南海大地震と津浪

嗚呼!!昭和二十一年十二月二十一日(土曜日)!!

高知は、この日、前日來からの晴天であつた。南國土佐とは云うものゝ流石に夜明け前は、相當に冷えて月影のない寒空に、星がまたたいていた。

歳暮迫る二十日の宵は、希望も新らたな楽しい正月を迎えんものと喜々として團樂を終え、人々はなほお圓かなる夢路を辿つている拂曉午前四時十五分、突如として大地も覆えさんばかりに大地震が襲來した。

故老の語草や、書物で見えていた安政大地震以來の大激震である。

次いで餘震津浪が襲來する頃、夜のぼのとは夜は明けはなれ曉の光の下に慘憺たる光景が展開された。

昨宵まで安らかに明け暮れた街も邑も、今や家屋は倒壊し死人の山を築き、一望ただ荒涼たる焼土、泥土、砂原、水沼と化して終つた。

この強震により特に地盤の脆弱な中村町方面の建物は、殆んど倒壊し、壓死負傷、救いを求める聲は巷に滿ち間もなく救ヶ所より出火、火焰は天に沖し一時は猛威に任すの他なく、街は極度に混亂人心は恐怖と不安のドン底に投げ込まれた。

更に須崎町、多ノ郷村方面は地震後間もなく、津浪が須崎内灣へ岸を洗いつゝ奥へ奥へと深く浸入し、その潮は多ノ郷村の山手まで押し寄せ、やがては山なす木材を押し流し引き潮となり、須崎驛前附近においては、避難せんとして逃路を北に縣道を駆ける婦女子は忽ちにして激流となつて押寄せて来るこの水中に捲込まれ悉く悲惨な運命を遂げた。

又新宇佐町は地震後間もなく襲いかゝる大津浪が前方の防潮堤を乗り越えて入り来り、低地の家屋は全部流失し、家財を搬出する暇なく寒空にうぢふるる様は真にこの世ながらの無間地獄を現出した。

復、高知市内は前年の大空襲の戦災のため全市殆んど焼土と化して、僅かに残された市街の東部方面は地震のため倒壊家屋夥しく死傷も少からず、且つ葛島橋附近の堤防に大亀裂を生じ折柄の高潮はドツと堤防を破壊して浸入したためこの方面はたちまちのうちに海原と化した。住居を失う者、高所を求めて避難する者或は倒壊家屋の下敷となつた儘放置される者等、人々は数日間を焦慮と悲嘆の涙で送つた。知寄町、下知方面は破壊した堤防を修築し水の侵入を防ぐに三週間を要しその間水浸しとなつた住民は困難を極めた。

しかしして電信電話は全く不通となり、汽車電車は勿論バスさえ停止して動かず、縣下至る所倒壊家屋々の他の障害路面の亀裂、欠潰等により車馬の往來杜絶し、墜道切通等は崩壊、埋没によつて、隣接町村との連絡を遮断され、中村町方面の如きは、翌二十二日の夕方に至り漸く孤立無援の窮地より連絡を得て、同町全滅の報がもたらされた。未だ明けやらぬ夜中のこととて混乱と狼狽と焦慮とに、人心は極度の不安に滿され、その夜人々は空地、學校、寺院等安全な地帯を求め、板や藁を敷いて僅かに互にたた生を護り得たことをなぐさめ合うのであつた。

こゝに今回の被害を更に概観するに殘虐なる爪牙にさいなまれた地區は、震源地が土佐海底であつた關係で海岸地帯は特に激烈を極めたが、幸いに山間地帯に至るに従い輕微であつた。

沿海地帯は地震後間もなく襲つた津浪のために甚大なる被害をうけた。しかし幸いにも洋上に浮ぶが如き沖ノ島村は津浪の被害皆無であつた。又土佐灣に臨む地方は津浪の襲來をうけたが、前方に防潮林や砂丘や防潮堤のあるためその難を遁れた所は澤山にある。

そしてあらゆる被害中、最も凄慘を極めたのは、人の死傷であつた。その數實に六百八十名、受災の總數は實に九万五千の多數であつた。これに次ぐ住居の被害二万五千、耕地四千町歩を失い、津浪による道路、橋の流失、堤防の欠壞など言語に絶する慘狀であつた。

しかしながら一時は手の施しようもなくぼうぜんとした人々もやがて力強く立ち上つた。助け合い勵まし合いながらひたすらに復興の槌を打ち鉄をふるつた。あらゆる戦後の惡條件と闘い不撓不屈致々として働んだ縣民の努力は實を結んで、春波濤かに寄せては返す沿岸各地には、木の香新しい家や新たに築かれた堤防護岸美田が往年にまさる姿として平和日本の再建に呼應し、着々殆んど完成への歩をつゞけている。

禍を轉じて福となす、明日への希望に生きる偉大なる人の力よ。

試みに大正、昭和年間における日本代表的強震を擧ぐれば次の通りである。

第一位 三陸沖 大地震 (昭和八年三月三日)

第二位 南海 大地震 (昭和二十一年十二月二十一日)

第三位 東南海 大地震 (昭和十九年十二月七日)

第四位 關東 大地震 (大正十二年九月一日)

本縣としては例の安政元年の大地震以來のこととされ、さかのぼつて寶永四年、慶長九年、白鳳十三年の三大地震まさに第六回の大地震であり、またその規模においては關東地震の五倍である。

## 第二章 土佐震災沿革史

### 第一節 總 說

我が土佐は古より大地震や津波の襲來をうけた悲運の記録が、歴史をひもどくと何回となく出て來る。またそれが百年とか百幾十年目位には、日本の何處かに必ずこの酷しい事實が繰り返されてゐる。今ここに、このことを書き記すことは無駄なことでないと思う。

この度の南海大地震も安政大地震と同じような現象を起したことは注目し得る問題である。現在の科學をもつてしては地震を豫知することはできないし、又その根本原因をまだはつきり証明することできない現在、土佐地震沿革史の一篇を掲げるとともに、一日も早く地震の豫知を逸早く一般に知らせる日の來るのを念願する次第である。

#### (1) 土佐の大地震

- 一、白鳳の大地震 白鳳十三年甲申冬十二月十四日
- 二、寛文の大地震 寛文元年十一月十九日
- 三、慶長の大地震 慶長九年十二月十六日
- 四、寶永の大地震 寶永四年十月四日
- 五、安政の大地震 安政元年十一月四日(午前九時頃) 五日(午後五時頃)
- 六、昭和の南海大地震 昭和二十一年十二月二十一日午前四時十五分二十六秒

地震記録の史に見えた最初は、今から千五百八年前河内國の地震である。

古は地殻の陥没や、地表の隆起については頗る幼稚な原始的解釋を下していた。

土佐のような僻遠の土地の記録は乏しく、山城國京都方面の記録は多いが、土佐は比較的中央より遠く、直接中央との關係が無かつた關係もあると思われる。

古記録による三大地震(慶長二年、元祿十六年、安政元年)の中で、安政の大地震等大激震であつたものの當時の模様が多少誇張に過ぎる点もあるが、地震、津浪のため大被害のあつたことは事實である。

大和朝時代地震記録

| 大地震                                  | 地 震   |       | 計   |
|--------------------------------------|-------|-------|-----|
|                                      | 大和國地震 | 丹波國地震 |     |
| 大和國大地震<br>(推古天皇即位七年四月二十七日)           | 一 回   |       | 三 回 |
| 十佐海嘯 筑紫國大地震<br>(天武天皇即位六年十二月)         | 一 回   |       |     |
| 土佐、伊豫の二國大地震 土佐海嘯<br>(天武天皇即位十二年十月十四日) | 一 回   |       |     |
| 合計                                   | 二 回   | 一 回   | 三 回 |

なかんづく、天武天皇六年筑紫大地震と、同十二年土佐國大地震とは、稀有の強震で、筑紫におけるものは大地に廣さ二丈長さ三千余丈の亀裂を生じ、百姓の屋舎は各村多く倒壊した。  
この時の地震に或る岡の上にあつた家の一軒は、その岡の崩壊とともに岡ごと移動されたが、家が破壊されなかつたので、家人は明方までその事を知らなかつたという珍話も記されている。

◇ 古今三千年を通じて稀に破壊的な白鳳大地震の文献

筑紫國大地震の六年後、天武天皇十三年に土佐國を震源地とした激震は大和朝時代は勿論、上下三千年を通じての稀に破壊的な大地震で、文献によると、  
到る所の山崩れ、河涌き、諸國の郡官舎及百姓の倉屋、寺塔、神社等の破壊は實に數え切れぬほど被害甚大なものであつた。

ために、人民六畜の死傷夥しく、國を擧げて男女叫唱、東西を知らずうろたえ惑つたという事で、かの伊豫國道後の温泉が埋没して湯を噴かなくなつたのも此の時の事であるといわれている。中でも土佐國は最も激烈を極め、田苑五十万頃陥没して海と化した。

更にその日の夕景には東方に當つて鼓動の如き音響が起つた。これこそ、伊豆島の北西二方面に自然に三百餘丈の土地が隆起して遂に一つの島となつたが、此の島を造るに當つて發せられた響であらうと言われた。

越えて十一月三日には土佐國にまたや大海嘯が起つて、爲に多くの運調船が失われた。この種の土地の隆起や陥没の記録に、斯の如く靈妙なる樂音の奇瑞の傳えらるゝ事があるのは、それは突出陥没に伴う自然の鳴動の神物化されたものである。

却つて説く天武天皇十三年の大地震は史に斯くの如き地動は、未だ會て無かつたと記録された程の激震であつた。従つて餘震も夥しかつたであらう。それは十月十四日の大震災に次いで十一月三日には土佐の瀬海に大津浪が起り、十二月十日には大和國に特に西より發するところの地震というものの記録を存することでも考えられる。

江戸時代地震記録 (抄)

|                                                                                                         |    |    |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|----|----|
| 土佐國大地震 (寛文元年十月十九日)                                                                                      | 一回 | 一回 |
| 土佐、薩摩、大隅、猿江、伊勢、紀伊、伊豆、上總、八丈島、諸國大地震、諸國大津浪 (慶長九年十二月十六日)                                                    | 一回 | 一回 |
| 土佐、大和、河内、攝津、讃岐、伊豫、阿波、伊勢、尾張、美濃、近江、猿江三河、相模、駿河、甲斐、伊豆、豊後、紀伊、就中中國、四國の諸國大地震                                   | 一回 | 一回 |
| 土佐、阿波、攝津、伊豆、猿江、伊勢、長門、日向、豊後、紀伊、海嘯                                                                        | 一回 | 一回 |
| (寶永四年十月四日)                                                                                              |    |    |
| 土佐、阿波、伊豫、讃岐、紀伊、淡路、豊前、豊後、筑前、筑後、肥前、肥後、壹岐、出雲、石見、播磨、備前、備後、備中、安藝、周防、長門、攝津、河内、若狹、越前、近江、美濃、伊勢、尾張、伊豆、諸國及支那江南大地震 | 一回 | 一回 |
| 土佐、紀伊、阿波、攝津、伊勢、播磨、伊豆海嘯 (安政元年十一月五日)                                                                      | 一回 | 一回 |

大地震 (海嘯、山海嘯を含む) 九十二回の中、殊に破壊的な震度の烈しさと被害の大とを以て有名な十二地震であるが、中でも、慶長二年、元禄十六年、安政二年の大地震は最も著名なものである。

慶長九年十二月十六日土佐、薩摩、大隅、遠江、伊勢、伊豆、紀伊、上總、八丈島等大地震、徳川幕府の開府當初

のもので瀬海の地、島嶼の多くは海嘯の被害夥しかつた。

土佐國佐喜濱のみで三千八百六人の死者を出した。

寶永四年十月四日土佐、伊豫、阿波、讃岐、紀伊、大和、攝津、伊勢、尾張、三河、遠江、駿河、甲斐、伊豆、相模、近江、長門、豊後、日向等の諸國の大地震

この日天氣快晴、未上刻の大地震で、屋舎の頽潰人畜の死傷するものその數を知らない。震災に續いて海嘯大いに漲り、土佐、伊豫、阿波、豊後、日向、長門、攝津、伊勢、三河、遠江、伊豆等を被ること夥しく四國のみにて人民四十万人死亡と言ひ傳えられた。「基熙公記」の記録は誇張に過ぎるようであるが。土佐國の災害を記せる「谷陵記」には「山を穿ち、水を漲らし川埋りて丘となる。國中の官舎民屋、悉く轉倒す、逃れんとすれど眩て壓に打たれ、或は頓絶の者多し、又は幽岑寒谷の民は巖石の爲に死傷するもの若干也、かゝる後に必ず高潮入なる由言ひ傳ふなどつぶやくところに同下刻より寅の刻まで晝夜十一度打來る也、中にも第三番の津浪高く、山の半腹にある家も多く漂流す。國中の死人二千餘人、當國に不限伊與、阿波、攝津、長門の海邊も頗る破壊に及ぶ、其外西國、中國、關東に地震ばかりといふ。云々」と見えて四國激震の様子は察せられる。之に反し、江戸、駿河原までは小地震で死人なく、神原、油井破損、清見寺、膏藥屋残らず潰れ興津、江尻、岡部、藤澤、島田、金谷、日坂家大に倒れ掛川家大に潰れた。袋井は残らず潰れ、見附、濱松、舞坂は半潰れ、荒井津波打ち御番所は流された。二川半潰、古田城潰れ、家も大破損であるのに、御油、赤坂、藤川は事なく、岡崎は小破、池鯉鮒事なく、鳴海、宮半潰、大垣城破損桑名事なく半潰の四日市橋無く、石薬師、庄町、龜山、關、大津まで小破で、大阪は地震崩家一万四千十五軒、高潮大船小船に入つて沈没し、橋敷三十八陥落した。或は家潰れて壓死するもの或は高潮に溺れて死するもの一万五千二

百六十人と稱せられた。

阿波の徳島は土屋敷二百三十軒、町家四百軒地震に潰えたが、潮入はなかつた。沿岸漁村の潮入亡所となれるものも多くあつた。

伊豫の宇和島領は小破であつたが、所々に潮入り、民屋の流失するもの多かつた。『總じて當國（伊豫）の潮入在々所々、田苑はいふに及ばず、故の市井は大半海底に沈没し、嶮山却つて平地となりぬれば、新に國土を生じ出したる心地也。凡そ世の中の物語はさしも異々しく聞えしも、面のあたり其實を失ふこと多かるに此程の損廢は引かへて言語文學にも盡すこと能はず。云々』と「谷陵記」は記している。

### 「三 災 録」

安政元年十一月四日朝五つ時過に畿内、東海、東山二道の諸國を大に震い明くる日、南海、西海、山陽、山陰四道の諸國を震つた。二震とも瀬海の諸國に海嘯を伴つて夥しい災害を興えたものゝ、引續きと見るが至當のようで、その後一年間は大小の地震絶える時なく、遂に安政二年十月二日の大震を惹起したのであつた。

もつと詳細には「三災録」に喜之助という七十五歳の老人が、安政元年十一月から、翌年十二月までの地震を大中小に分ち根氣よく數えあげたのが記載せられているが、それによると總計八百十七度とある。

### 時代思想上より觀た、地震記録に反した傾向について

大和や山城方面の地震記録は詳細を極わめているに反して、土佐の如きへきすうの地方ではそれが例え破壊的大地震であつても、精密な被害状況の記録を缺いているが、一面時代思想的に忌み嫌つて記録を取えて等閑に附した傾向が確かにあつた。

◇當時上下一同の畏怖驚愕の尋常でなかつた事、殊には此の變災を以て天譴的のものであると考へ、その天譴招來の罪を政道の缺陷に歸し、天子親ら鞠躬如として王道にいそまれた事は、當時の詔に徴しても明らかで、又天皇の自責さること深く、王道の欠陥よりひいて民の災害を憂苦する者なきを悲嘆して檢地震使を遣わし、ひそかに其の被害状況を視察せしめられ、慰問と救護とに努めたことによつても知られる。

◇天譴思想より一變して崇の信仰は時代を経る毎に變遷している。

(1) 平家の怨靈である。

(2) 生靈の祟の所爲に歸している。

(3) 神祇官の龜卜と陰陽寮の易筮式占よりこれを兵動の兆であると奏していた。

◇天平六年の大地震、同十七年の大地震ほど、天下を畏怖せしめた地震はない。これというも震災地が京都若しくはその近き地方であつたからである。

◇よしそれが激震に屬する地震の類ではなかつたとするも、他の記録の之れが年月日を明記しないのは、全く地震記録のこの頃等閑に附せられてあつたことが知られる。

## 第二節 縣下各地に傳えらるゝ大地震に關する文獻

前述の如く土佐は白鳳の昔より大地震や海嘯に見舞われているが、特に沿海地方は昔より度々地震海嘯に遭いその被害甚大にして、この事實を後世に傳へ警告してゐる慈愛の心やりが覗われ、ありがたさや温さを感じ胸に迫るものがある。

須崎、宇佐、岸本等海嘯の襲來をうけた海邊には碑を建てて供養をなし、文中で警告をしてゐる。文献の有名なものは谷陵記、三災録などで、土佐の災害を記してゐる。

- 一、須崎町史の白鳳年間の大地震の記録
- 二、須崎町史の寶永の大地震
- 三、宇佐町誌の寶永の大地震
- 四、中村町の魚市場記録の安政大地震
- 五、中村町の安政大地震の被害表
- 六、須崎町史の安政大地震
- 七、宇佐町誌による安政大地震
- 八、谷陵記(抄)

## 一、白鳳年間の大地震 (須崎町史より)

今を去ること千二百五十餘年天武天皇の御世白鳳十三年甲申冬十二月十四日發震土佐國の田畑五十余万頃陥没して

海となるとは歴史の語る所なり。然れども此時の地震に土佐は果して何れの地点陥没せしか、歴史は其詳細を語らざるを以て諸説區々たり。或は云ふ我須崎の南方陸地なりと未だ其當否を知らず、今を去る一千二百余年前白鳳年間當國大地震ありて廣き陸地陥りて海となりきといへり。今其跡はこのあたり(須崎)の南ならんと云ふ。

古老の傳説によれば白鳳以前我が須崎附近に戸嶋、千軒、野見、十軒と云ひて戸嶋と野見とは當町一市邑にして長者の鼻は住居せし屋敷跡なり。海のよく澄みたる天氣の麗かなる日干潮を待ちて此の所に至れば井戸石垣等を海底に認むるを得べしと未だ其眞否を検する能はずと書しあり。

## 二、寶永の大地震 (須崎町史より)

寶永四年丁亥十月四日巳の上刻より東南方の大鳴音と共に、大地震起れり。此日天朝かに氣暖く人々單衣を纏ひたりしが變起るに及びて其騒動一方ならず。今こそ天柱の折け地維缺くるかと思ふ許りにて如何なる丈夫も歩行し難く山嶽の崩るゝ土煙四方に漲りて天地倏ち晦冥稍々暫くは咫尺を辨せず爲に方角を失ひし老若男女哭き叫ぶ様實に悲惨を極む。而して地震の裂罅より潮水湧き出で人家は倒れ、或は崩れ、無難にて存するもの一軒もなし。山里の樵夫は家業の爲山に行きけるにこの難に逢ひ落ち來る岩石に壓されて死する者數を知らず。未の上刻より大潮浸入し來りて人家は悉く流れ、死人筏を組みたるが如く、牛、馬、犬、猫等亦皆死す。幸ひにして山に逃げ上り幸ふじて死を免るゝ者あり。親兄弟下に流れ死するも助くる力及ばず。哭聲山谷に響き渡り、慘憺たる光景はよく筆紙の盡す所にあらざるなり。翌日の晚迄潮水の來り侵すこと十二回。然るに須崎の沖なる石ヶ礁より沖は海上頗る靜かなりしと言ふ。恰も此時角谷の山頂より眺め居たる人の話によれば、戸嶋と長者の鼻との間潮全く干き暫くは沼の如く此處に小舟に

二人乗り、流れ來りしが一人は船より落ちて沼に入り行方知れず、残れる一人は舟に在りと見えしが忽ち大潮來りて小舟と共にその影だに見えずなれり。其後聞けば一人は新町の何某、今一人は惠美須屋五右衛門にてありしと。

此地震には畿内紀州の海邊は言ふに及ばず、東は豆州箱根より、西は九州の東南岸、何れも大潮に侵され、阿波の國も亦潮高かりしと當國の中種崎より宿毛迄の内浦には大潮侵入し赤岡より東の灘邊は多少の浸水に止まりしとぞ。

須崎浦に入り來りし潮は半山川筋（新莊川）は下郷の中、天神の上四五丁の所に及び多ノ郷は加茂宮の前吾井ノ郷は爲貞といふ所まで侵入せり。これらは何れも川に沿ひて侵入せしなり。土崎は在家の悉く流失し、押岡、神田は之れに次ぎて人家の流失あり、池ノ内村は在家被害なく、須崎は死人四百餘人あり。斯くも死人の多かりし所以を考ふるに糺池より出づる堀川の橋は地震のために落ちし所へ潮入り來り、人々渡るべき便なく、後より大勢押掛け先なる者堀川へ壓し込まれて大半死したるなり。然るに水練あるもの或は天運に叶へる者は偶々死を免れたり。此時此あたりに住居せし澁谷金の王と言へる力士大橋（今のメガネ橋）の元に來り多くの人を援けて其身は遂に伊勢の松に登りて助かりしといふ。

此時も家屋を流されたる人々は皆山に假住居し、縁を求めて流れざる住家を頼み飢寒を凌ぐなど目もあてられざる様なり。大潮に家財道具、着物、食物等の流れたるを流れざる在家の者共是幸なりと理不盡に拾ひ取り罹災者の憂を顧みず、賊徒同様の振舞ありしかば官府より須崎庄屋年寄に仰せ付け屹度穿鑿せしむ。然るに隠し置きて出さざる徒多きに付被害者等在家に入り込み無断にて家宅を探し口論、鬭争に及びしこと多かりき。糺の池には死人流れ集りて筏を組める如し。其中にて衣類其他にて見覚えある者はこれを證に己が身内を尋ね出せり。左もなき者は假令父母兄弟と雖も面影變り果て求むべき便なく、却つて物凄き跡となり、尋ねる術なしとて街道に泣き叫べども其甲斐なし。

池中に浮沈む死體は鳶、鳥之を啄む噫、何等の慘ぞ之に就ては官府より指圖に従ひ、長さ數十間ばかりの大坑を二列に掘り、之にその屍を埋めたり。後安政三年其百五十年忌に當り古屋竹原（尉助）當町大善寺谷に碑を建て題して寶永津浪之塚と云ふ。此の變災に家を流されたる者等は飢饉に及ぶに付官府より救米を定められ男三合女二合にて三十日、或は四、五十日の間其家業に就く迄給せられ、小屋掛、材木等手寄りの山より給付されたり。此大變ありて人心恟々たるに乗じ逃道の暴者盜賊の類これあるべしと官府に於ては詮議の上役人朝日奈忠藏を須崎に遣はされたり、岩永より角谷迄の間往還道筋或は海となり、或は海水溢れ、往來する能はず、即ち鳥越坂の峠より池ノ内村へ横道を作りて下分村岡本へ越す。この外笹ヶ峰といふ古道を往還の道として門屋山際に通ぜり。諸役人の送りの番所も當分池ノ内村にあり、送夫の者共此處に詰めたり。翌々年の秋今在家本番所に歸る。

### 三、寶永の大地震（宇佐町誌より）

寶永四丁亥年十月四日、大地震と共に海嘯が起り、慘狀を極めた。其日は一天晴れ渡り、十月というに單物、帷子を着る程の暖さであつた。午の上刻（午前十一時）より大地震動し初むるや、其騒動は實に言語に絶した。地軸の碎くると共に山嶽崩れ落ちて、土煙は天に揚り、凄慘の狀、何に譬へんようもなく、只驚愕と恐怖のため心も空に、親は子を呼び、子は親を求めて泣き叫ぶ有様は目も當てられず、やがて未の上刻（午後一時）より大潮入り來り、人家は悉く押し流されて、溺死する者數を知らず、死屍累々として恰も筏を組めるが如く水上に浮ぶさま、まことに悲惨の極みであつた。當時の被害は左の如くである。

宇佐。潮は橋田の奥、宇佐坂の麓迄來り、僅かに山上の家一軒残る。溺死約四百人。



滑。濱。在所は悉く海に没し深さ五尋六尋に達した。  
 福。島。上に同じ、溺死百餘人。  
 龍。青龍寺の客殿のみ残つたといふ。  
 井。尻。亡。所。

土佐全體としては左の如くである。

- 一、流 家 一萬五百七十軒。
- 一、潰 家 四千八百六十六軒。
- 一、破損家 千七百四十二軒。
- 一、死 人 千八百四十四人。
- 一、失 人 九百二十六人。
- 一、流失米穀 二萬四千四十二石。
- 一、流失牛馬 五百四十二疋。
- 一、濡 米 一萬六千七百六十七石。
- 一、手 船 百七十二艘。
- 一、商 船 百三十六艘。

尙當時の模様を南路志には左の如く書してゐる。

人を轉ずること丸き物を投げ轉ずるが如し。恐しとも何とも云々

又萬變記には

諸人廣場に走り出づるに五人七人手を取り組むと雖も俯向けに倒れ三四間の内を轉じ、或は仰向けになり又俯向けになりて逃走すること容易ならず。と

#### 四、安政大地震について中村町に遠る魚市場の記録

一、嘉永七寅年安政と年號替る右十一月五日晝七ツ時大地震任其夜大ゆり小ゆり共又又三日目大ゆり是も同七日之七ツ時むかわり目迄少々づゝ毎日の事、其余もおりく。

一、入野村地中半分より下も通流失中井早崎下田ノロ二、二流失かきぜ川添口はゞ弘くき水深さ十三尋立ち千五百石斗の市艘出入いたし穀物澤山に積入田の口の助けに相成申し田ノ口中井早崎は野地に相成潮先きは上田ノ口丸山の下迄中村之潮は崩岸クニギシの川一ぱいにて塩先き大用寺之下迄渡川は築地の沖の瀬迄。

一、家々相崩れ焼失家數軒おしうたれ人いたみ四五十人残り家山端に多し市中一統に山々へ己屋を打ち十日余り居申候内色々相考候處文政五年年郷切替に付右魚間屋文助御免被付候御役場へ口上を以右之次第一々御願申上候を私差留め是迄一向場合も無御座兩人相勤申候上御願申上ては不人情と奉存然共御願申上不申ては亡父へ譯相立不申命せしはいわ思付然に安政二卯四月私より俵万助へ願出認差出御座候處愁願全年八月差出左の通り御聞濟に相成候

五、安政大地震に於ける中村町の被害表

| 當時の街名  | 現在の街名 | 人口    | 死亡數 | 全潰  | 半潰 | 燒  | 失   | 計   |
|--------|-------|-------|-----|-----|----|----|-----|-----|
| 本町     | 本町    | 二一七   | 九   | 二八  | 〇  | 〇  | 一六  | 四四  |
| 上町     | 南、北上町 | 二三七   | 二   | 一九  | 〇  | 〇  | 一八  | 三七  |
| 紺屋町    | 紺屋町   | 一二八   | 一   | 一七  | 一三 | 〇  | 〇   | 三〇  |
| 東新町    | 中ノ丁   | 一五〇   | 五四  | 三〇  | 一一 | 三一 | 一三  | 六二  |
| 京新町    | 北京町   | 三七八   | 五   | 一四  | 二六 | 六  | 六   | 四六  |
| 今新町    | 新町    | 二三七   | 〇   | 二二  | 九  | 六  | 六   | 三七  |
| 下町     | 西下町   | 三七〇   | 〇   | 一〇  | 三  | 〇  | 〇   | 九   |
| (所在不明) |       |       | 愛宕町 | 三一  | 七  | 〇  | 〇   | 一七  |
| 計      |       | 二、〇〇五 | 三〇  | 一五六 | 七〇 | 九〇 | 三一六 | 三一六 |

六、安政大地震

(須崎町史より)

安政元年甲寅十一月四日朝五ツ時(午前八時)地震あり。敢て強きにあらざるも長震にして尋常に異なれり否や潮狂ひて堀川に逆流すること夥しく港内に碇泊せる船を東へ流し西へ引くこと終日なりき。此の日八幡磯に例の蛭子祭相撲興行ありて人々群集せしが、此有様を見て一方ならず心配し、早くも山に逃げ上り夜半に家に歸りしものあり。翌五日は天晴れ渡りて一片の雲なく、風なく、人々安堵の思をなせり。然れども暑きこと夏の如し。相撲の翌日の事

とて酒宴を張れる家も多かりしが夕七ツ半時(午後五時頃)に大地震起り、漸次強くなり忽ち暗夜の如く大地は所々に二、三尺、四尺、五尺、六尺と裂け、中より潮を吹くあり、土煙を飛ばすあり、一開一合山崩れ、谷湧き居宅土藏皆倒れて算を亂せり、人々五人、六人、手に手を取りて泣き叫び、東西南北に駆廻り、父子兄弟互に呼び、或は俯伏せに或は仰向きに倒れ、二三間歩みては又倒れ、歩行自由ならず。半時ばかりにて稍々小震となりたり。此時人々は實永の大變の如く犬潮溢れ來らん、早く山に登るべし、とて我れ先にと取るものも取り敢ず山に駆け登る。稍々心豪なるものは蒲團等を携へて逃れたり。時しも大潮天を蹴て海門に衝き入り來る物音凄まじく乾坤崩るゝかと思ふばかりにて光景轉た凄慘なり。堀川橋は皆地震に搖り落されて其上に潮水二三丈高く數百の家又船を浮かし來ること實に目ざましかりき。之を見て逃げ後れし人々素破堀川は渡るべき術なし。

疾く西の五紋中山へ登れよ。と呼び、叫びたれば皆々先を争ひて刈谷の方へ走り行けり。然るに又二つ石の堤推し破られて大木人家等池中に推し流さる數百の人々は打渡らんと駆入りて水中の洲上に躍る様誠に哀れに見えたり。されど幸ひにも寛永の津浪よりは潮高低かりしかば、潮の退く間を見て辛うじて西の山に登り死するに至らざりき。既にして日は暮れけるに、今宵は暗夜なり。地震は大小幾百度と云ふ數を知らず。人々曉まで一睡だにせず。相引合ひて神を念じ、佛を祈りける程に夜深くなるに隨ひ着衣に置き凍れる霜は雪よりも白し、此夜山にて親子はなれなくして生死も知らぬ者多く、親は子を呼び、子は親を慕ひ泣き悲しむ聲哀れなり。夜は明け六日となりたるに此日は晴天にて日光人を射る。地震は猶止まず、されど壯者は各家に歸り見れば昨日晝の仕事を爲せし儘にて戸障子は開放し適々閉し家ありても壁は落ち、柱はゆがみ、瓦は飛び、一軒として全きものなく、我家に入りて衣類、蒲團、米、味噌等を手當り次第に取り後をも見ずして又山に逃げ行けり、其翌日も地震は止まず、總て是より四、五日間は晝夜四、

五十回も大震あり人々家に歸る能はず。何十日間も山にて暮せしが、十二月の末にもなれば稍々震ひも遠くなり、人々新年を迎る準備に忙はしかりし、其三十日に又大地震ありて狼狽し、東西の山に駆け上れり。越えて其翌年も時々震動止まざりしは左に記する如し。

安政の大地震一ヶ月の記録

|     |      |   |   |      |
|-----|------|---|---|------|
| 大 震 | 一二回  | } | 計 | 七一九回 |
| 中 震 | 一一一回 |   |   |      |
| 小 震 | 五九六回 |   |   |      |

右の記録は高知市鷹匠町水門御番人嘉助（當時七十五歳）の調査せしものなり。

### 七、安政の大地震（宇佐町誌より）

有名な安政の大地震は其範圍の廣範な事、被害の甚大な事、實に驚くべき大震で當時は設備も不十分で死亡者も甚だ多く江戸に於ける死亡者二十三萬四百八十五人は、關東大震災の死者十萬六千九百人の二倍餘に及び、負傷者は八十九萬三千八百五十人の多きに達して後者の六萬五千人の約十四倍に及んで居る。以てその被害の如何に甚大であつたかを知る事が出来るであらう。

宇佐は海濱にある爲に津波に襲われ全町殆んど全滅の悲運に際會したのである。

安政元年十一月四日（町誌には八十年位前 九十二年○前）午前十一時頃相當大きい地震が襲い來り海潮定まらず、平日より多く引き又寄せ來る事七八度に及んだが然し人家迄は來ず、翌五日は晴天で風なく殊に溫暖の好天氣であつ

たので、人々は安心して平常の通り家業に従事し、何等の警戒もなさなかつたが午後五時頃に至り俄に天薄闇となり俄然近代未曾有の大地震起り、山嶽崩壊、人家倒壊し人々救を求め忽ちにして阿鼻叫喚の巷と化し去つた所へ大津波が襲い來り、海に近い家々は悉く一呑みに捲き込まれ宇佐村中殘家六十軒、内造作にかゝるもの僅かに貳拾餘軒、溺死十餘名に及んだが、最も悲惨を極めたのは福島浦で（現宇佐町福島）引潮の爲にさらはれ行く人々多く其慘狀は實に見るに忍びずようやく残つた者も北方山地に逃れようとして走り出したが、後の川は橋が悉く落ちて渡れず、只あわてふためいて東方に走り遁れるより他に道なく、瞬く内に四十餘人は潮の中に吞まれ、只水泳の達人は泳ぎ逃れ幸福な人は板に縋つてようやく生命のみ取止める事が出來た。

二番目に襲い來つた波は更に甚だしく、僅かに残つて濱分及十町程後方の部落を一呑にし、此處は全く一戸をも残さぬ廢墟と化し終つたのである。

このように寄來る波は七回に及び、中にも第四第五の波は最も甚だしく十五六町を隔てた山際の家も多くは流失し果てて残るは只一戸山の上にあつた源右衛門の家のみであつたと言う。以てその慘狀の如何に大であつたかを知る事が出来るであらう。

其後十年間位は毎日少く共五六度、多きは三四十度の地震の無い日はなく村民は只戦々恟々として日を送つた、殊に同年大晦日の如きは夕方より夜明までに百二十餘度ゆつたとの事である。

其後數ヶ年の村民の生活は實に悲惨を極めたらしく眞覺寺の僧靜照の日記節分の日の條に。時節柄に付き鬼の窺ふ様なる家もなければ福の神の宿る家もなし。豆を投げて鬼は外福は内の聲も聞えず、皆々己家にて竊かに大根の煮しめを食うて節分の心持をなす。と言ひ又

橋田の者共毎日海に拾い來りし衣類を洗い乾かし家々に竿を渡さぬ所もなく蚊帳小袖杯かけならべたる有様は時ならぬ土用干の如し。と當時の悲惨な生活の状態を述べてある。

又かゝる激變に際會し、精神的にも肉體的にも打ひしがれた人々は自然に氣風も荒み來り所々に喧嘩口論も起つたと見えて、

正月は他に用事もなく日夜地震の度數をかぞへると喧嘩を見聞するのみの用にて誠に氣易きことなり。と述べて居る。

かゝる慘狀に加えて地震後の不自由、非衛生的な生活は遂に流行病を誘發し、死亡者相續いて出で慘憺目も當てられぬ狀を呈したようである。

## 八、谷 陵 記 (抄)

寶永四丁亥年十月四日未上刻大地震起り山穿て水を漲し川埋て丘となる、國中の官舎民屋悉く轉倒す、逃んとすれども眩て壓に打れ或は頓絶の者多し又は幽岑寒谷の民は巖石の爲に死傷するも若干也係る後は必ず高潮入なるよし、云傳ふなどつぶやく所也。同下刻津浪打て海邊の在家一所として残る方なし。

未の下刻より寅の刻まで晝夜十一度打來る也。中にも第三番の津浪高く山の半腹にある家も多く漂流す國中の死人二千余人當國に不限伊豫、阿波、紀伊、攝津、長門の海邊も頗る破壊に及ぶ其外西國、中國、關東は地震計と言江戸より大阪迄の模様如斯

江戸駿河原まで小地震、芳原家倒る死人なし神原油井波損清見寺膏藥屋不殘潰る澳津江尻家大に倒る岡部、藤枝、

島田、金谷、日坂上に同じ掛川家大に潰る、袋井不殘潰、見附濱松半潰れ、舞坂同じ、荒井津浪打て御番所流れ、二川半潰、吉田城潰る、町家も大に破損、御油、赤坂、藤川事なし、岡崎小破橋落る。

池鯉鮒事なし鳴海宮半潰、大垣城破損、桑名事なし四日市まで橋なし、四日市潰、石薬師、庄野、龜山、小波、關大津まで小破地震崩家一万四千十五軒、高潮入大船小船。

大坂競落す橋數三十八、家倒れ壓に打れ或は高潮に溺る共死人一万五千二百六十三人。

亦隣國の様子、

徳島土屋敷二百三十軒民屋四百軒地震に潰る潮入はなし黒土浦郷共潮入も所富岡浦郷、阿波小波橋半亡所泊浦小波井佐より志和木までは存亡不知由岐兩浦共亡所溺死夥し淺川在家大形流失死人少し海部豎浦事なし朝小破共喰亡所死人少々(以下略す)

## 第三節 各地に遺る震災記念碑柱

寶永、安政の大地震では土佐の沿海地方は大津浪が襲來して人畜、家屋、田畑の被害甚大であつた。この慘狀を傳へるとともに、後世の人々のため、油斷しないよう警告を記念碑に刻み今もなお縣下各地に遺つてゐる。

- 一、須崎町大善寺山麓の寶永津浪溺死の塚
- 二、新宇佐町萩谷の安政大地震の碑
- 三、岸本町飛鳥神社境内の安政大地震の碑

- 四、甲浦町萬福寺の碑
- 五、大方町入野の安政大地震碑
- 六、白田川村伊田の松山寺の齧の碑
- 七、清水町中ノ濱の海岸と部落はづれにある碑
- 八、市仁井田小十津中山の鼻の安政大地震の供養塔

一、寶永津浪溺死の塚 (須崎町大善寺山の麓にあり)

この塚は昔寶永四年丁亥十月四日大地震して津浪起り、須崎の地にて四百余人溺死し池の面に流れ寄り筏を組みたるが如くなるを、池の南面に長き坑を二行に掘り死骸を集め在りしを今度百五十年忌の弔に此處に改葬するもの也。其事を營まんとする。折しも安政元年甲寅十一月五日又大揺りして海溢れけるが其の事を傳聞、且記録もあれば人々思ひ當りて我先にと山林に逃登りければ昔の如く人の損じは無りし也。唯其中に船に乗り沖に出んとして逆巻浪に覆されて三十余人死したり、痛ましき事也。何なれば衆に洩れて斯はせしと云に昔語の中に山に登りて落くる石にうたれ死し、沖に出たる者恙なく歸りしと云事の有を聞誤認ししもの也。早く出で沖にあるは知らず。其時に當りて船を出す事は難かるべし。誠むべき事にこそ將昔の人は地震すれば迎て津浪の入る事を辨へず。浪の高く入り來るを見るよりして逃げ出でたればおくれかくの如き難に逢へり哀にも又悲しまざらんや。地震すれば津浪は起るものと思ひて油断すまじき事なり。されど揺り出すや否や浪の入るにも非ず少しの間はあるものなれば、ゆり様を見計ひ食物衣類等の用意して扱て石の落ちざる高所を撰びて遁るべし。さり迎高山の頂にまで登るにも及ばず。今度の浪も古市

神母の邊は屋敷の内へも入らず。昔も伊勢ヶ松にて數人助かりしといへば津浪とてさのみ高きものに非ず、是等百五十年以來二度迄の例なれば考にも成るべきなり。今茲に此營を成すの印且後世若斯る折に逢はん人の心得にもなれかしと衆議して石を立て其事をしるさんことを余に請ふ。因て其荒増を擧げて爲に書付る者也。

安政三年丙辰十月四日 古屋 尉 助 識

附 本 願 主 發 生 寺 現 住

|       |               |
|-------|---------------|
| 世 話 人 | 智 隆 房 松 園     |
| 同 同   | 龜 屋 久 藏       |
| 同 同   | 鍛 冶 活 助       |
| 同 同   | 橋 本 屋 吉 左 衛 門 |

二、海 嘯 の 跡 (新宇佐町)

安政の大地震は、海嘯を呼び起し慘害を極めたことは、前述の通りである。其狀況を誌した記念碑が、其の潮先に近き宇佐萩谷に建てられてあり、碑文を左に記す。

南無阿彌陀佛

安政元甲寅歲十一月五日申の刻大地震日入前より津浪大に溢れ速こと八九度人家漂流残る家僅六七十軒溺死の男女宇佐福島を合て七十余人なりき都て宇佐の地勢は前高く後低く東は岩崎西は福島の低みより汐先逃路を取巻故昔寶永の變にも油断の者夥敷流死の由今度もその遺談を信じ取あへず山手へ逃登る者皆恙なく衣食等調度し又は狼狽て船に

のりなどせるは流死の數を免れず可哀哉其翌日は御倉開けで御救米頂戴し凍餓に至るものなく誠に難有御仁澤下りければ後代の變に逢ふ人必用意なくとも、早く山の平なる傍に岩なき所を擇びて逃よかし且流失の家材衣服等を拾ひ得し人暫時の内福に似たれども間もなく流行の惡病に染み悉皆なくなりしを眼前見聞したると告げ殘し殊に兩度溺死の人の菩提を弔ん爲にと衆議して此碑を立るものと云爾

安政丁巳十一月

世 話 人 西 村 咄 助 識

綠 屋 傳 平

久 市 屋 菊 右 衛 門

梶 和 屋 源 次 郎

三、安政大地震記念碑

(香美郡岸本町飛鳥神社境内西側にあり)

徵 砦

諺に油斷大敵とは深意あることにて仮初におもふべからず。安政元寅年十一月の事なりき朝五時頃常に覺へぬ程の地震して岸本の浦塩のさし引十間余りの違あり又手結の港内も干揚りて鰻をつることなと夥し同日兩度小震すこしばかりあれとさばかり驚く人もあらざりしを翌五日八時過大に震動すること三度七時過大雷鳴の如きどうどうと響してひとしく大地震す。こはいかと衆人驚く程こそあれ家藏高塀器物の崩れ破るゝ音さらにいふ計なし。逃んとすれど目くるめきて自由ならずはうゝ家を出けるに津浪打來りて當地は德善町より北の田中赤岡の西濱並松の本吉原は庄屋

の門迄に及び又川尻の波は赤岡神輿コシヤス休のほとりまでにいたり、古川堤夜須堤も押切られて夜須の町家など過半流失すかくて人々は老を扶け幼を携へ泣叫びつゝ王子須留田又は平井大龍寺の山へと逃れ登りて命助かりぬ。此時國中の官舎民屋多く轉倒し就中高知下町幡多中村等に失火ありて一円焼亡し凡そ怪我横死何百人といふ事なし。幸甚なるかな此地は神祇の加護によりて一人の怪我もなく彼山々に己家をかまへ日を経るに隨ひて震もいさゝか穩に成しかは惠あまねき大御代の忝を悦つゝ皆己々家に歸きぬ。抑寶永四年の大變は今を去ること百四十八年になりぬれば又かゝる年數にも必變事の出こんなといふ人もありなめと世變はいつあらん事豫めしりかたしされと常に菟あらん時は兎に角心せは今其變にあひて狼狽せざるへし今の人こゝ寶永の變を昔はなしの如くおもひて既に油斷の大敵にあひぬ。さるによりて後世の人々今の變事を又昔咄の如くおもひて油斷の患なからしめんためことの上しを石に(一字不明)りて此御社と共に動きなく萬歳の後に傳へんとふるひおこしたるは里人か誠心のめてたき限りにそありける。干規たまゝ高見の官舎に祇役して俱に彼の變事に逢たれば其よし書てよの人々の乞ふにまかせてかくは記し侍りぬ穴賢

安政五年戊午季秋 綴 且

德 永 干 規 誌

前 田 有 稔 書

澤 村 寅 次 刻

四、甲浦町萬福寺に遺る碑

萬福寺にのこる碑の碑文は歲月を経て不明であるが、貞享元年十月十三日の銘がある。十月十三日は日蓮聖人の入

滅の日にて此の経塚は當山の中腹にありて、此の塚まで津浪が來りたりと傳えられて居る。  
この地に船越の地名あるは、津浪の浸入をうけたとき、此の坂を船が越えたりとの言傳えより生したりと云々。

五、大方町入野の安政大地震碑

嘉永七甲寅の歲十一月四日晝微々の震動有潮海濱に流れ溢る土俗是を名て鈴浪と云ふ是則海瀧の兆也其翌五日朝土俗海濱に望に瀧眼の海色洋々として浪靜也欣然として家に歸る平素の業を事とす時に申効に至て忽大震動瓦屋茅屋共崩家となる瀧眼に全家なし氣埃濛々として暗

西東人俱に後先を争ふて山頭に登山上より西川を窺見るに西牡蠣瀨川東吹上川を漲り潮正に溢る是則海備也最潮頭緩々として進第二第三相進至第四潮勢最猛太にして實に膽を冷す家の漂流する事數を覺ず通計に海潮七度進退す初夜至て潮全く退く圍は沙漠と成田嚮更に海と成る當時震動する事劇く會聞寶永四丁亥歲十月四日も同然今に至て一百四十八年今此石此邑浦の衆人勞を施して是を牡蠣瀨川の邊に採て此記を乞來は是を後人に告がためならん、鈴浪果して海瀧の兆なり爾來百有餘年後此言を知るべき也

安政四年丁巳六月朔

野 並 晴 識

入野 若 連 中  
村 浦

六、白田川村伊田の松山寺の麓にある安政大地震の碑

白田川村伊田の松山寺の麓に碑がある。風雨に晒されて、今では碑文が消えて讀めなくなつて居る。しかしこの地にも津浪が來たことは事實である。この碑に残る碑文の一部に「一里以上沖に船を出したら津浪には安全である」との事をしるされてある。

七、清水町中ノ濱海岸の碑二柱

(一) 中濱部落の海岸小高い所にあるもの。

正 安 政 二 卯 (判讀不明)  
面 浦 中 安 全 講 中

中之濱浦

碑 文

「嘉永甲寅十一月大地震靜否大潮四五度入ル高サ二丈斗リ諸國人多死ス」  
(二) 中濱部落から清水に通ずる、舊道部落はづれの一角にあるもの。

正 嘉永七年寅十一月五日申ノコノ大地  
南 無 阿 彌 陀 佛  
面 震靜否浦ニ大潮入流家死人夥シ

右側面

「前日ヨリ潮色ニゴリ津波並ニ井ノ水ニゴル或ハ干カレル所モ有兼テ心得ベシ是時諸人之悲歎難盡言語仍而爲後世謹述之

中濱ノ浦 池 道之助 清 澄」

裏 面

「于時安政二年乙卯三月建之池先祖墓所」

右側面

「寶永四年亥十一月四日未刻大地震靜否浦々大潮入ルコト三度流家死人夥し翌子ノ年中少々の地震タエズ大地しんの時火をけし家を出ルコト第一也家にしかれ焼死者多」

(片仮名平仮名混用している)

「附記」池道之助という庄屋が建立したものであろう少しく欠けた不明な處は現在中濱郵便局にある記録の中の碑文の原稿より之れを補うた。

### 八、市仁井田十津中山の鼻の安政大地震の供養塔

高知市仁井田十津中山の鼻に、安政の大地震の折り津浪のため死体が澤山流れて來て、其の場所に埋葬し南妙の文字をきざみ塔が建てられている。



# 第一章 地震、火災、津浪及土地の隆起と沈下による被害状況

## 第一節 總 説

昭和二十一年十二月二十一日の未明、午前四時十五分二十六秒、突如として大激震が起り、間もなく海岸線は津浪の襲來をうけ、更に各地に火災の發生を見たので、縣下一圓に未曾有の混亂と慘害とを生ぜしめたが、又土地の隆起と沈下による、浸水或は船の出入が困難となる等の被害も甚大であつた。

かくの如く地震に次ぐ津浪と火災と土地の隆起、沈下によつて一層災禍を大ならしめたのであつた。

この悲惨なる修羅場は實に安政大地震以來未曾有の事で、多年築きあげた幾多の文化産業施設は根底より破壊されたのであつた。

左表の内務省警保局調の南海大地震被害一覽表に示す處より見るも、如何に本縣下の震害が激甚であつたか首肯されるのであるが、なお本縣下の被害を總括したものは左の如くである。

また地震、津浪、土地の隆起と沈下について、東京大學の専門家の博士諸氏の學說により、記録上に多少の矛盾あることを發見するが、附録篇に集録した學術的記録により是正されるところもあることと思ふ。



| 近畿                         |                          | 中 國                   |                                                                                              | 四 國                                              |     |
|----------------------------|--------------------------|-----------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------|-----|
| 滋賀                         | 京都                       | 大阪                    | 兵庫                                                                                           | 奈良                                               | 和歌山 |
| 鳥取                         | 島根                       | 岡山                    | 廣島                                                                                           | 山口                                               | 徳島  |
| 香川                         | 愛媛                       | 高知                    |                                                                                              |                                                  |     |
| 漁網五三統                      |                          |                       | 漁網一九統                                                                                        | 漁網三〇統                                            |     |
| 六五町歩                       | 二町一反                     | 二五三町歩                 | 二七〇町歩                                                                                        | 三〇〇町歩                                            |     |
| 製塩工場                       | 塩田 自家製塩 三町三反<br>損害 三九三万圓 | 塩田 二町一段<br>損害 一、二五〇万圓 | 塩田 損害 六五三町歩<br>五億圓                                                                           | 自給製塩殆んど<br>壊滅                                    |     |
| 二六                         | 一〇〇                      | 一 二 三 一               | 二〇 三六 三五                                                                                     | 七六                                               |     |
| 二九                         | 一                        | 一 二 一                 | 三 六 八                                                                                        | 多數                                               |     |
| 二四〇                        | 一                        | 一 九 一                 | 三 一 三                                                                                        | 多數                                               |     |
| 米 甘藷 木 酒                   | 米 甘藷 木 酒                 | 醬油 四石一斗               | 米 炭 薪 木 炭 薪 木 炭 薪                                                                            | 米 炭 薪 木 炭 薪 木 炭 薪                                |     |
| 六、八四〇石<br>三〇、〇〇〇貫<br>二、八二俵 | 一五〇石                     |                       | 三、六三〇石<br>一、〇〇〇石<br>二〇、〇〇〇石<br>三、〇〇〇石<br>二七、〇〇〇石                                             | 三、六三〇石<br>一、〇〇〇石<br>二〇、〇〇〇石<br>三、〇〇〇石<br>二七、〇〇〇石 |     |
| 二ヶ所故障<br>一部不通              | 九ヶ所故障<br>逓信、警察共全<br>線不通  | 若干の被害あり               | 警察・逓信・鐵道<br>共一時機能停止<br>警察・逓信共殆<br>んど全線不通<br>警察全線不通、<br>逓信市内六回線<br>市外〇〇回線<br>無電停電のため<br>大部分不通 | 三ヶ所故障<br>一ヶ所故障<br>大分市以外の警<br>電不通<br>若干の被害あり      |     |

二、南海地震被害状況 (高知縣下)

| 合 計                            | 九 州                     |                         |                         |                         |                         |
|--------------------------------|-------------------------|-------------------------|-------------------------|-------------------------|-------------------------|
|                                | 宮崎                      | 大分                      | 熊本                      | 長崎                      | 福岡                      |
| 漁網<br>二、二七<br>統<br>他に損<br>害百万圓 |                         |                         |                         |                         |                         |
| 六七八町                           |                         |                         |                         |                         |                         |
| 七反以上                           |                         |                         |                         |                         |                         |
| 一、三三三                          |                         |                         |                         |                         |                         |
| 一六以上                           |                         |                         |                         |                         |                         |
| 六七以上                           |                         |                         |                         |                         |                         |
| 米 薪 斗 斗 米 薪 斗 斗 米 薪 斗 斗        | 米 薪 斗 斗 米 薪 斗 斗 米 薪 斗 斗 | 米 薪 斗 斗 米 薪 斗 斗 米 薪 斗 斗 | 米 薪 斗 斗 米 薪 斗 斗 米 薪 斗 斗 | 米 薪 斗 斗 米 薪 斗 斗 米 薪 斗 斗 | 米 薪 斗 斗 米 薪 斗 斗 米 薪 斗 斗 |
| 一、五〇〇石<br>四〇〇石                 | 一、五〇〇石<br>四〇〇石          | 一、五〇〇石<br>四〇〇石          | 一、五〇〇石<br>四〇〇石          | 一、五〇〇石<br>四〇〇石          | 一、五〇〇石<br>四〇〇石          |
| 三ヶ所故障                          | 三ヶ所故障                   | 三ヶ所故障                   | 三ヶ所故障                   | 三ヶ所故障                   | 三ヶ所故障                   |

(一) 人畜其の他被害

死 六七九人  
 負傷者 一、八三六人  
 倒壊家屋 五、四一八戸  
 半壊家屋 九、九〇六戸  
 流失家屋 五六六戸  
 焼失家屋 一九六戸

第二編 災 害

第二編 災 害

浸水家屋 七、〇一三戸  
 漁船被害 (流失及破損) 二、三八九隻  
 耕地被害 (流失及浸水) 三、九九五町  
 罹災者 九三、二五九人

(二) 被害總額

土木關係 八九五、四五〇千圓  
 水産關係 一七〇、六八一〇  
 林業關係 一〇〇、二三二〇  
 耕地關係 一七七、四四二〇  
 農業關係 三三、四〇一〇  
 商工關係 五三四、四八〇〇  
 官公關係 四九、一一二〇  
 學校關係 四八、二一四〇  
 衛生關係 二四、六七一〇  
 其他 一五、六七六〇  
 一般住宅 七四三、一五〇〇

合 計

二、七九二、五〇九千圓

三、郡市別震災狀況調 昭和二十一年十二月二十八日現在 (高知縣下)

| 郡別  | 死亡  | 行方不明 | 負傷   | 家屋   |      |      |      | 道路欠損 | 田畑浸水 | 流失船舶 | 罹災者 | 備考 |
|-----|-----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|-----|----|
|     |     |      |      | 倒壊   | 半壊   | 流失   | 浸水   |      |      |      |     |    |
| 安藝郡 | 三〇  | 五    | 六    | 三〇   | 一三   | 八    | 三〇〇  | 七    | 〇    | 七三三  |     |    |
| 香美郡 | 五   |      | 一    | 五    | 二    | 〇    | 三    | 三    |      | 一三   |     |    |
| 長土郡 | 二   |      | 四    | 三    | 三    | 〇    | 七    | 七    |      | 一三   |     |    |
| 高知市 | 三三  |      | 三三   | 一、一五 | 一、三三 | 一、八二 | 〇    | 一八   | 〇    | 一、四〇 |     |    |
| 高知郡 | 三   |      | 三    | 一、一五 | 一、三三 | 一、八二 | 〇    | 一八   | 〇    | 一、四〇 |     |    |
| 吾川郡 | 八   |      | 三    | 一、一五 | 一、三三 | 一、八二 | 〇    | 一八   | 〇    | 一、四〇 |     |    |
| 高岡郡 | 六   | 四    | 一    | 一、一五 | 一、三三 | 一、八二 | 〇    | 一八   | 〇    | 一、四〇 |     |    |
| 幡豆郡 | 三〇  |      | 一    | 一、一五 | 一、三三 | 一、八二 | 〇    | 一八   | 〇    | 一、四〇 |     |    |
| 計   | 六七〇 | 九    | 一、八三 | 四、八〇 | 五、〇〇 | 五、〇〇 | 一、八三 | 七三   | 三    | 七、一三 |     |    |

第二節 地震に依る被害狀況

山間部は比較的地盤が固く、平地は概ね土砂で地質は軟弱である。殊に東は安藝郡野根町や、西は幡豆郡中村町の

如きは舊河道や沖積層の上に當つてゐるので被害が比較的激甚であつた。その他の町村においても局部的に或る部落や或る街が甚大な被害を蒙つてゐる。

- 一、全 壊 四、八三四戸
- 二、半 壊 九、三四一戸
- 三、罹 災 者 七一、一六二人
- 四、死 者 六七九人
- 五、傷 者 一、八三六人

の如き被害を蒙り海岸地方は、倒壊家屋が多く山部方面は、山崩れのため埋没する等の被害を相當出した。被害状況の最も慘澹たるものは中村町である。木造建二階建は、二階のみを残し階下は全部破壊されている。同地は數次の出水で腐朽した關係もあり、殆んど全滅といつてよい位倒壊した。高知市では、鐵筋コンクリート三階建文化ビルと四階建の中央食堂が、震災で周囲が焼失して残つていたが無慘に破碎され幾人も生埋となつた。

又特に東西山部到る處山崖は崩壊し、道路も又崩壊して交通は全く杜絶して、各町村の連絡を切斷したので多大の不便を來したのであつた。

### 第三節 火災による被害状況

火災はまだ夜明け前であつて、火氣を用いた家庭は僅少であつたので、比較的火災の發生は少かつた。ただ、特殊

な湯屋とか自動車の油類とか、木炭自動車用木炭火等よりするものと、火燵の残火があつた家庭から發した等の原因から、縣下各地に火災の被害を見たのであるが然し火災による被害は悲惨であつた。なお火災による被害は左の如くである。

### 火災による被害表

| 市町村名    | 全 焼 | 半 焼 | 備 考              |
|---------|-----|-----|------------------|
| 宿 毛 町   | 六   |     | (1) 湯屋より發火       |
| 小 筑 紫 村 | 一六  |     | (2) 石油樽より流失石油に引火 |
| 中 村 町   | 一六三 |     | (3) 自動車發生爐、燧火其他  |
| 須 崎 町   | 九   |     | (4) 自動車車庫の残火     |
| 高 知 市   | 二   |     | (5) 燧 火 等        |
| 合 計     | 一九六 |     |                  |

### 第四節 津浪による被害状況

今回の大地震後の津浪は安政の時より襲來が早かつたといわれている。

『意外に早かつた』ということとは學理上からそのようなことは根據の無いことであるといわれているが、各地海岸地方の津浪は早かつた。その確實な測定はなされていなかったので残念である。被害の最も大なるものは新宇佐町、須崎町、多ノ郷村、伊豆田村、甲浦町をあげることが出来ると思う。

◎須崎町の碑(抄)

揺り出すや否や浪の入るにも非ず少しの間はあるものなれば、ゆり様を見計ひ食物、衣類等の用意して石の落ちざる高所を撰びて遁るべし云々

◎新宇佐町の碑(抄)

後代の變に逢ふ人必ず用意なくとも、早くの山平なる傍に岩なき所を擇びて逃よかし且流失の家材衣服等を拾ひ得し人暫時の内福に似たれども間もなく流行の惡病に染み悉皆なくなりしを眼前見聞したると告げ殘し云々  
この二の碑の遺つてゐる須崎町と新宇佐町が最も甚大な被害を蒙つた。

新宇佐町は言傳えにある通り何の用意なく北へ避難して死傷は無かつたが、須崎町は逃げ後れと逆流して來た激流のため驛前附近で澤山の死者を出したことは、後々の人はよく注意せなければならぬ事である。なお津浪による全縣下の被害は左の通りである。

1、津浪による全縣下の被害狀況

- (一)、流失家屋 五六六戸
- (二)、浸水家屋 五、六〇八戸
- (三)、浸水田畑 三、〇三〇町歩

四、流失船舶

八一六艘

(四)、死 者

六七九人(地震を含む)

(六)、傷 者

一、八三六人(〃)

第五節 土地の隆起と沈下に依る被害狀況

土佐灣に面した海岸線で東端の室戸岬、西端の足摺岬は隆起して室戸港、室戸岬港、清水港等も船の出入に支障を生ぜしめたものもあつた。

高知市及その附近の沈下は甚しく浸水の爲め住家、田畑等相當大なる被害を蒙つた。その他の地方でも沈下によつて浸水して田畑の作物に大なる被害を與えている。